

P1-26.**顎関節のdynamic MRIによる動態観察の可能性—正常ボランティアにおける検討—**

(専攻生・放射線医学)

○嶋崎 洋子

(放射線医学)

齋藤 和博、柿崎 大

(霞ヶ浦・口腔外科)

松川 聡

(霞ヶ浦・放射線科)

小竹 文雄

【目的】 顎関節の動態画像を true FISP を用いて撮像し、画質について評価を行い、臨床使用の可能性について考察する。

【方法】 対象はボランティア 20 名、40 関節。プロトン強調像 (TR/TE 2,000/20 msec、FA 180°、ETL 3、NEX 1、matrix 192×256、FOV 10 cm、slice thickness 3mm、gap 0.6mm、PAT factor 2) の sagittal 像、coronal 像を撮像し、問診とあわせ、放射線科専門医、口腔外科医の 2 名にて診断を行った。動態画像は true FISP を用い、開口、閉口を被験者に指示し 1 断面撮像した。撮像シークエンスは初めの 10 名で至適シークエンスの検討のため iPAT、脂肪抑制両者の有無の複数シークエンスを撮像し、放射線科医、口腔外科医の 2 名で独立して画質評価を行った。その結果をもとに、シークエンスを以下のように決定し (TR/TE 3.63/1.82 msec、FA65°、matrix 128×128、FOV 15 cm、slice thickness 3 mm、1 回撮像時間 0.6 s、measurement 120 回)、初めの 10 名を含む 20 名について同様な検討を行った。検討項目は、関節円板、下顎頭、関節隆起、翼突筋後縁の形態の観察程度により 3 段階 (1: 観察が困難もしくは不能、2: 観察可能、3: 非常に良好) に分類した。

【結果】 初めの 10 名の検討では、iPAT、脂肪抑制ともに使用しないものが良好な画質を得ると評価された。全てにおける検討では観察可能な関節円板は 75%、下顎頭、関節隆起は 95% 以上、翼突筋後縁 20% であった。観察者の一致度は関節隆起で低かったが、その他は中等度以上の一致率であった。

【結論】 臨床使用のためには、画質的には関節円板の観察を向上させる必要がある。

P1-27.**CO₂-VIBE (Volume Interpolated Breath-hold Examination) 法を用いた早期子宮体癌の MRI 画像診断**

(大学院単位取得・産科婦人科学)

○仲地 紀智

(産科婦人科学)

赤枝 朋嘉、井坂 恵一

子宮体癌の筋層浸潤、頸管浸潤の有無はその症例の予後を左右し手術術式の決定に影響する。子宮体癌の治療成績の向上は、いかに正確に術前診断をし、適切な治療計画を立てるかが鍵となる。子宮体癌の MRI による進行期診断が提唱されているが、術前画像診断は手術や病理組織学検査から得られた術後病理診断とのずれが生じることがある。以前より我々は、子宮体癌の進行期評価の精度を向上させるべく子宮内腔を CO₂ ガスで拡張させ MRI を撮影し、子宮内腔病変を評価する CO₂-VIBE (Volume Interpolated Breath-hold Examination) 法¹⁾を公表したが、今回さらなる症例を重ね、その有用性につき検討した。当教室で 2001 年 5 月から 2006 年 12 月までに子宮体癌と診断し、手術と CO₂-VIBE を行った子宮体癌の Ia 期から IIb 期の 53 例を対象とした。本法により子宮体部の病巣は鮮明に描出され、腫瘍の広がりや正確に把握することが可能で、術前画像診断と術後病理診断はほぼ一致した結果が得られた。しかし、本法は画像情報が膨大なため、その保存方法に課題があるが、子宮内腔病変に対する術前評価法として有用性の高い方法であった。

P2-28.**吸入麻酔薬によるプロテインキナーゼ C- γ の脳細胞内再分布**

(大学院二年・麻酔科学)

○武田 明子

(麻酔科学)

宮下 亮一、室園美智博、松本 晶平

渡辺 省五、一色 淳

【背景】 プロテインキナーゼ C (PKC) はセリン・スレオニンキナーゼの一つであり、細胞内の情報伝達に